
若ママ&若すぎパパ

柑夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若ママ&mp;若すぎパパ

【Nコード】

N9863H

【作者名】

柑夏

【あらすじ】

純粋な男の子と女の子のラブストーリー

前書き

第0章 出会い

0—1

いつもと変わらない、朝の登校

最近、退屈でたまらない

「夏美！なにボーっとしてんの？」

朝からテンションが高いこの、彼女は

白谷仁百しろたに にも

同じクラスで、家が近いため、一緒に登校している

「あっ…別に？」

私は笑ってごまかした

私は、愛坂夏美^{あいさかなつみ}

普通の女の子

そして、一緒に登校している、私の親友

金倉麻希^{かなぐら まき}

麻希とも、同じクラスで、大の親友

「朝から、うるさいんだよ、仁百は」

麻希、直球

「そうー？」

仁百は、大きな声で笑った

第0章 出会い

0—1

「なにあの子？知り合い？」

麻希が言った

麻希の視線の先には小学生の男の子がいて

その子は私をじっと見ていた

「知らない…」

私がそう呟くと「でもあの子夏美のこと見てるよ」と麻希が言った

0—2

「どうしたの？」

そう仁百がその子に聞いた

そしたら、その子は走ってどこかに行ってしまった

「なによもー!」

仁百はイラついていた

次の日：その次の日：その次の日：

毎日毎日、その子は私を見つめていた

しかし私は、動いた

「君、何でいつも私を見ているの？」

そう聞いた

私がそう聞くとその子は初めて口を開いた

「可愛くなって。見てる」

そう一言言って走った

「なにいゝ!?!? 夏美今告白されたよね!?!」

そうからかうように仁百が言った

「そんなわけないじゃん!」と私は笑って仁百に言った

でも気になった、その子が。

次は名前が知りたくなった。私は何を考えているのか分からなくなった

0・3

次の日もその子は私を見ていた

私は気になって仕方がなくて

「君名前は？」と聞いてみた

「それより、あなた名前は？」と逆に聞かれてしまった

「私は愛坂夏美〔アイサカ ナツミ〕」

「僕は桜井航祐〔サクライ コウスケ〕だよ」

その、桜井航祐君はもう走って逃げたりはしなかった

「何年生？」

そう私が聞くと、少し恥ずかしそうに

「6年生だよ」と桜井君は言った

少し照れながら言う姿が、とても愛らしかった

0・4

「へえー私は中学2年生ね」

私は知らない間に自分から言っていた

なんか自分のことを知って欲しかったし、知りたかった

「そうなんだ。ねえ、今日の放課後ここで待ってるから」

そう言って桜井君は走って行った

「ねえ何話してたの？」

麻希は教室に入った瞬間不思議そうに聞いてきた

「軽く自己紹介かなあ」

と私は答えた

別になんとも思っていなかったから。桜井君のことなんて

だから『放課後待ってるから』って言われたことも話さなかった

0・5

「ここで待ってるってどこで待ってるんだし…」

私は1人で教室から出た

今は5時、春だからまだ暗くはない

でもさすがに小学生はもう家に帰っただろう

私は1人、いつも朝登校してくる道を歩いて行った

そしたら、桜井君が1人で小さい石段に座っていた

私は桜井君に近寄った

「なんのよーですか？」

私はいかにも他人事のように話し掛けた

「あっ…ありがとうございます。来てくれて」

微妙に改まっていたことに疑問を持ちながらも私は続けた

「だって来てって言ったじゃん？だから来たの。で、なに？」

0・6

「僕はあなたが好きです」

桜井君はそう呟いた

微かにだったが、重要なところはしっかり聞こえていた

「ありがと。でもね、お互い名前知ってからまだ2週間経ってないんだぞ？」

桜井君は一般的に見てもとても可愛い顔の子だし

私も嫌いな顔じゃあなかった。だから純粹に嬉しかった。

でもやっぱり、知り合ってたいていしてまだ少ししか経っていないのが引かなかった

「それでもいい。今から知っていけばいいと思う。」

彼の目は真剣だった

あまりにも真剣な雰囲気ですって誤魔化すことも不可能くらいだ
った

第1章 毎日

1・1

あれから、あたしは断れなかった

「お試期間みたいになってだめ？」

そんなこと言ったら

「いやだなあ。そういうの。無理なら無理でそう言ってほしい」

ってまた真剣な表情で言われちゃって：

「じゃあ…付き合っちゃいますか？」

なんてかるーく言ってみた

「ほんと？ほんとに!？」

そんな風にはしゃぐ桜井君を見ていたら可愛くなって

「ほんとだよ」

とかって微笑んじやった：

私達は付き合いはじめることになりました

1
—
2

「おはよー!」

昨日の事聞かれそうだな…

「おはよ」

私は少し緊張していたせいでテンションがさがっていた

「おはよう」と誰かが後ろから私の肩を叩いてきた

振り向くと後ろに立っていたのは桜井君だった

「お、おはよう」

私は慌てて返した

「えっ何!? この2人どうなってるの!?!」

仁百が少し焦りながら言った

私は、ゆっくり口を開こうとした

「僕達、昨日から付き合うことになりました」

と桜井君が言ってくれた。

私は思わず「桜井君…」と言ってしまった

113

私達はあの後アドレスを交換したのだ

そして

「もう桜井君って言わないでください」
って言われたばかりだった

「じゃあなんて？」そう私が言うと

「好きなように呼んでくださっていいです」って

だから私は“こうちゃん”

桜井君は“なっちゃん”

と呼び合う約束をした

あと、敬語禁止の約束も

「なっちゃん？今“桜井君”って言った？」

と、さっそくつつこまれてしまった

「んー？バレた？ごめん…」

と言うと「いーよ！可愛いから、許す」

「朝から熱いねー！じゃあ先に行ってるよー」

と…その場に2人置いていかれてしまった

「なんかごめんね」と謝ってくるこうちゃんがすごく愛らしかった

114

正直言って初めは、付き合うことにあまりノリ気じゃなかった

一応私より2つ下だし、あんまりこうちゃんのこと知らなかったから

すぐ終わるんじゃないかと心配だった

でも彼は私が思っていたよりしっかりした人間だった

彼は誰よりも私を想ってくれた

そして、誰よりも私を大切にしてくれた

でも、これから毎朝、こんなラブラブな状態で学校に行くと思うと…
ちよつと複雑な気持ちだった

でも、こうちゃんと付き合い初めてから、毎日がとても楽しく
私にとっては、毎日宝石箱みたいに思えた

少し恥ずかしかったけれど……

第2章 初めての

第2章 初めての

211

「あたし先に帰るねー!」

そう私が言うと

「先に帰るじゃなくて、一緒に帰れないでしょ?」

と麻希が笑いながら言ってきた

もちろん………凶星である 笑

そんなこと恥ずかしくて言えない

「分かってるなら言わないで!」

と少し熱い両頬を手でおさえつけながら言った

「夏美可愛い」

と麻希から言われた

……こんな気持ち、初めて……

2
1
2

「帰ろくか! なっちゃん」

こうちゃんは優しく私に微笑む

「うん!」

私も元気よく返事をする

私達は付き合い始めてやっと1ヶ月

まだなんにもしていない……

でも今日は、いつもと何かが違った

「「こうちゃん?」

私がそう聞くと

「なに？」

って……少し前にいた、こうちゃんが振り返った

そこまでは、いつも通り

でも、明らかにいつも通りではないことがあった…

それは……

こうちゃんの顔！！

213

「こ、こうちゃん！？」

私は思わず声を出してしまった

こうちゃんの顔が真っ赤になっていたのだ

私は慌てて自分の手でこうちゃんの両頬を挟んだ

案の定、熱い

「こうちゃん、熱あるよ!」

それを聞いた瞬間、こうちゃんは、笑った

「熱なんてないよ 大丈夫大丈夫!」

って……

「いや明らかに熱あるから!」

と私は言った

そしたらこうちゃんは

「じゃあ、僕の家に来て!!そして僕の看病して!!」

そう真っ赤な頬をしたこうちゃんが言った

2—4

「お邪魔します…」

私は、初めて男の人の部屋に入る…

だからすこし緊張：

「僕の部屋こっち」

と、こうちゃんは2階へ案内してくれた

こうちゃんの顔はもうやばかった

バタンッ

こうちゃんの部屋の扉のしまる音が妙に大きく感じた

こうちゃんはなにかおかしかった

「なっちゃんっ、すうきっ…」

そう一言言ってその場に倒れこんでしまった

2—5

んんんん…

あれ…私…寝ちゃったみたい……………

重い瞼を開けると

目の前にひろがっていたのは

見覚えの無い天井

「はあはあはあ…」

すぐ隣では顔を赤くしたこうちゃんが

荒い呼吸をしながら苦しそうに眠っていた

私はこうちゃんが起きないように静かに部屋を出ようと思っていた

しかし、私が立ち上がった瞬間

——ギイッ

音がした

私、そんなに太ってるっけ？

「なっちゃん？」

こうちゃんは目が覚めてしまったようだ

ああー…

「どうした？」

私が言うと

「行かないで。今日はうちに泊まって。お願い」

こうちゃんは目を瞑ったまま私に言った

第3章 初外泊

第3章 初外泊

3・1

「もしもし？麻希？今日麻希の家に泊まるってことにしておいてくれない？」

私は麻希に電話でお願いした

「いいけど、ちゃんと理由は明日聞かせてね」って

一応協力してくれた

「もしもし？ママ？私今日麻希の家に泊まるね。」

そう一言言って勝手に電話を切った

「こうちゃん、あたし今日泊まるね。お家の方にあいさつしたいんだけど…」

と私が言うと

「今日は僕1人なんだ」

とこうちゃんは眩いた

その時、私の心臓は破裂しそうなくらい

ドキドキしていた

3
—
2

やばい。普通に考えたら、かなりやばい。

こんな、付き合って約1ヶ月の2人が同じ空間で寝るなんて…

今は6時。もう少しだけ暗い

「こうちゃん？お風呂入る？」

そう言ってから後悔した。

こんなに熱があるのに入るわけがない！

「えっ？僕は無理だと思う…」

「だよね…ごめん。」そう私が言うと

「なっちゃんが入ってきなよ？」こうちゃんは綺麗な目で私に言った

「あ、そう？じゃあ、そうする」

私がそう言うと、こうちゃんは満面の笑みで私を見た

「でも、服とかない」

私は1番重要なことを忘れていたのだ

3・3

「僕のそのタンスの3段目あけて」

ベッドに寝ているこうちゃんは言った

「うわあ。Tシャツいっぱい！」

そこには色とりどりのTシャツがあった

「好きな色の着ていいよ」こうちゃんは自信気に言った

そんなこうちゃんはやっぱり愛らしい

「あと4段目もあけて」

4段目の半分には、長いジーパンやジャージなど

もう半分には、短いズボンなどが

「好きなのを」

とこうちゃんは微笑んだ

かなり迷ってしまった、そんな私を見てこうちゃんは「まだあ？」と笑った

私は幸せだった

3・4

ガーガー…

初めて聞いたドライヤーの音…

「だれ？」

背後から、細く震えた声が聞こえた

私はゆっくりと振り向いた

——可愛い子

それが第一印象であった

そこには両目がクリクリしてて少し長めの髪の毛を2つに結った女の子がいた

「お家の人？」

私は恐る恐る聞いてみた

「はい…あなたは…？」

その可愛い子は私に聞いた

私は、焦りを隠せなかった

「わ、わたしは」

と私が言いかけた時

「春乃、今日帰らないんじゃないっけ？」

とこうちゃんが急に来た

「お兄ちゃん、この人誰？何？」

とその子はこうちゃんに聞いた

「風邪ひいちゃったみたいで熱下がらないから、お兄ちゃんの彼女が泊まりがけで看病してくれることになったんだ」

とこうちゃんはその子に説明してくれた

「初めまして！愛坂夏美です。よろしくね」

と私はその子にはほほ笑んだ

「妹の春乃です」

とその子は少しも笑わず私に言った

「お兄ちゃん、どうでもいいけど私今日家にいるから」

そうこうちゃんに言葉を投げ捨てて春乃ちゃんはどこかへ行ってしまった

3—6

「ごめんね。うちの妹、僕が女の子と話しているの見るの嫌なんだって」

こうちゃんは私に謝った

「もしかしたら、春乃ちゃんこうちゃんのこと好きなんじゃないの？」

と私は言った

そしたらこうちゃんは「まさかぁ」と笑って誤魔化した

こうちゃんはきつと、春乃ちゃんの気持ちを知っているのだろう……

その後、春乃ちゃんは私たちの前に姿を見せなかった

少し心配だったが本音を言うといろいろとやりやすかった

台所借りて、おかまにあったご飯でこうちゃんにおかゆ作って

おかゆ食べさせて

タオル濡らして、こうちゃんの額においたり

こうちゃんの汗拭いたり

楽しかった、幸せだった、この時間が止まればいいと思った……

———気がつけば私は眠っていた

こうちゃんの手をしっかり握りながら

目を開けてみれば、こうちゃんと目が合った

「よくなった？」

私のその問いかけに

「うーん…なっちゃんが今日も泊まってくれるなら元気になるかも

しれない…」

とこうちゃんは真面目な顔をして言った

「じゃー今日も泊まっちゃおうかなあー？」

と私はふざけて言った

こうちゃんは冗談が言えるほど元気になっていたのだ

第4章 涙

第4章 涙

4・1

んんんんん……

すっごく気持ち悪い

なんで………

「なーっちゃんっ！かーえろっ？」

こうちゃんが私の腕を引っ張る

「ご、ごめん。なんか気分悪い。」

私は思わず、もどしそうになってしまった

「どうしたの？大丈夫？」

こうちゃんは心配そうに私を見た

「ううん…かなりやばい…今日は家に帰るわ…ごめん」

と私はこうちゃんを置き去りにして行こうとした

「じゃあ僕看病するね。なっちゃん家に行こう」

こうちゃんはそう言って私を自分の背中に乗せた

4・2

「あなたは？」

とお母さんはこうちゃんのことを不思議そうに見て言った

「僕は、僕は、夏美さんとお付き合いさせていただいている…それより早く夏美さんを！」

こうちゃんは相当焦っていた

「あ、そうね」

とお母さんも言った

私は病院に連れて行かれた

私は胃腸炎と診断された

2・3日は休まないといけないらしい

その夜私はこうちゃんにメールを送った

「今日はありがとう。本当に心配かけてごめん！

私、明日と明後日休むから、一緒に行けないし、帰れない！」

と送った

「気にしないで！早く治してね！！

明日も明後日もなっちゃんのところ、行くから大丈夫だよ」

と返って来た

4・3

ねむい…ねむい…ねむい…

甘いココア匂いが私の鼻を包む

うっ！

しかしその匂いが吐き気を誘う

眠かったのに眠気が一気に飛んで行った

もうすぐ4時　そろそろ来るかなあ

ピーンポーン…

来た

がちや

こうちゃんが泣きそうな顔をしながら私を見た

「なっちゃん……………」

4・4

「なっちゃん…………大丈夫？」

私のことを心配してくれるのはいいけど…

「どうしたの？こうちゃん」

「なっちゃん…僕…ごめんね」

なんだか、こうちゃんの様子がおかしい

「こうちゃん？」

こうちゃんは私の目を見た

その瞬間：こうちゃんの目から涙が零れ落ちた

こうちゃんの涙は

まるでダイヤモンドのように輝いていた

「バレちゃった：みんなに：」

こうちゃんは泣きながら私に言った

4・5

「何が？」

私は心当たりがなかった

「僕達が付き合っていること」

こうちゃんは両目から大粒の涙を流して言った

「うん：そんなのもうみんな知っているんじゃないの？」

私は言った

「知らなかったみたいで：違うクラスの子が僕に飲ませたんだ」

こうちゃんは呼吸を整えながら言った

「媚薬を飲ませられた」

私は驚きのあまり、何も言えなかった

4・6

「で、どうしたらいいか分からなくて来ちゃった…」

私は黙ってしまった

「でも、でも！何にもしないよ？薬なんかでなっちゃんと繋がらない」

こうちゃんは焦って付け足した

「うん…薬に頼りたくない…」

私も言った

「じゃあ、明後日また来るね。今日はなんかしちやいそうだから帰るね。じゃ」

と言ってこうちゃんは私の前から去った

私はこうちゃんが言った後もずっとドキドキしていた

私は正直、少し怖かった

その時は一つになるなんてまだ早いと思っていたから

第5章 発覚

第5章 発覚

第5章 発覚

5・1

――私達は繋がった

――私達は一つになった

こうちゃんの匂いにする…

こうちゃんの匂いってベッドの匂いだったんだね…

「なっちゃん…愛してる…」

こうちゃんが肩ぐらいまである私の髪を撫でながら言った

「あたしも」

私はそう呟いた

「なっちゃん体大丈夫？」

こうちゃんは心配そうに私に言った

「うん。大丈夫だよ。それより疲れた…寝てもいい？」

こうちゃんは「いいよ」と優しく言って私を抱きしめた

こうちゃんの腕の中は思っていた通り温かった

5
—
2

私は予定通りに、体調を崩した2日後に普通に学校へ行った

そしてその帰り道、私は言ってしまったのだ

「媚薬はもう抜けた？」

「抜けたよ。やりたいの？」

とこうちゃんはどこかを向いたまま私に言葉を投げた

「こうちゃんはどうなの？」

と私は言った。するとこうちゃんは

「僕は本当になっちゃんを愛してるから、なっちゃんがいいなら…」

とこうちゃんは言った

私達はこうちゃんの家へ行った

5—3

「お邪魔しまーす…」

こうちゃんは私を自分の部屋に案内した

「今日は誰もいないんだよ」

こうちゃんは私に一言言った

「なっちゃん…本当にやるの？」

私は正直迷っていた

きつとこうちゃんも迷っていたのだろう

「……こうちゃんはどうしたい？」

私は恐る恐るこうちゃんに聞いた

「僕は……ちょっと怖いかもしれない」

そう言った

「なっちゃんは？」

そう聞かれた

「私は…わかんないよ…」

だから私達は一つになった

だから私達は繋がった

「ごめん…なっちゃん」

とこうちゃんは泣きそうな顔で言った

「なんで謝るの？」

「だって僕…なっちゃん…」

こうちゃんは私に謝ろうとした、だから私はこうちゃんの口を自らの口で塞いだ

「なっちゃん…愛してる」

こうちゃんが肩ぐらいまである私の髪を撫でながら言った

「あたしも」

私はそう呟いた

「なっちゃん体大丈夫？」

こうちゃんは心配そうに私に言った

「うん。大丈夫だよ。それより疲れた…寝てもいい？」

こうちゃんは「いいよ」と優しく言って私を抱きしめた

こうちゃんの腕の中は思っていた通り温かった

……………私は浅い眠りについた

5・5

（数週間後）

「ゴホッゴホッ」

仁百と麻希が私の背中をさする

「大丈夫？夏美？」

麻希が言った

そして空気が読めない仁百が続けて言った

「もしかして妊娠？まっさかね」

私には心当たりがあった

なので

その日のうちに麻希に付き添ってもらい病院に行った

5・6

「どうしよ、妊娠してたら」

私は麻希に言った

「大丈夫でしょ。だって何もしてないんでしょ？」

麻希は笑顔でそう言った

「…あるんだよね…心当たり」

麻希は何も言い返さなかった

「愛坂さん」

そう呼ばれ私は診察室に入った

なんだかよく分からない検査をしてまた大ホールに返された

「どうだった？」

麻希はすぐ私に聞いた

「まだだった」

と私は一言呟いた

「そう」

麻希はまた暗い表情になった

「愛坂さん」

5分くらいでまた呼ばれた

ドアを開けると若い女の人が座っていた

「どうも。結果から言わせていただukuわね？」

とその先生は丁寧に聞いてくださった

「はい。お願いします」

「愛坂さん、妊娠していますね。4ヶ月」

先生はなんかの紙を見ながら言った

「私はあなたの担当をすることになった中山由理〔ナカヤマ ユリ〕です。よろしく」

私は驚いて何も言えなかった

「驚いている気持ちはわかります。3日以内に彼と相談して生むか生まないか決めて来なさいね。」

そう先生は優しく言った

「今日はもういいわ。彼にしっかり言いなさいね」

と先生は言った

第6章 告白1

第6章 告白？

6・1

ぷるるるっぷるるるっ

携帯の呼び出し中のコールが長く感じる

「もしもし、なっちゃん？」

こうちゃんはいつもと変わらぬトーンで話す

「今日一緒に帰れなくてごめんね。明日は一緒に帰れるから一緒に帰ろうね」

私はそう言った

妊娠のことは直接言いたかったから…帰り道で言おうと決めていた

「うん！分かった！」

こうちゃんは少しテンションが上がったと思わせるような明るい声で言った

「それだけなんだ…ごめんね。こんなことで電話して」

明るい声のこうちゃんとは違って暗い声で私は言った

「ううん。わざわざ電話してくれてありがとうね。声聞けて嬉しかった」

こうちゃんは明るく言った

「ありがとう。じゃあ明日ね、ばいばい」

「ばいばい」

そう言って私達は電話を切った

6・2

いつも通りの帰り道

でも、私にとってはいつも通りなんかじゃない

私にとっては……私の、私達の、運命を決める重要な帰り道

「こうちゃん、私、」

そこまで言ったら、私の目から涙が零れ落ちてしまった

「どうしたの？ なっちゃん」

こうちゃんが心配そうに私の顔を覗き込む

「ごめん…。本当にごめんなさい」

私は何も悪いことしてないはずなのに、涙が止まらなかった

「どうしたの？ 言って？ お願い」

こうちゃんは真剣な眼差しで私を見つめた

「……うん。」

ようやく落ち着きを取り戻した私は覚悟を決めた

6・3

「私、妊娠したの…」

そう言ったらまた涙が溢れてきた

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」

私はどうしたらいいか分からなくなって、何度も謝った

その間、こうちゃんは黙っていた

「なんで？」

こうちゃんがやっと言った一言

私は言った

「何が…」

6・4

「なんで謝るの？」

こうちゃんは優しい顔で言った

「だってあたし…」

私は言った

「生んでくれるよね？ なっちゃん？」

こうちゃんは私に明るく言った

私は嬉しすぎてさっきよりも大粒の涙が出てきた

「ありがと。こうちゃん」

私はこうちゃんにそう言った

「やったー！ 僕もパパだよおー！」

とこうちゃんは無邪気に笑った

私はこうちゃんが

こうちゃんでもかっただって思った

私はこうちゃんが

こういう人でよかったって思った

私は

こうちゃんが彼でよかったって思った

ありがとう、こうちゃん。そしてこれから、よろしくね

6—5

「もしもし？麻希？」

その日の夜私は麻希に電話した

「おう夏美。言ったか？桜井君に」

麻希は心配してくれていたのだ

「うん。言ったよ」

私はこうちゃんになんて言ったかとなんて言われたかを丁寧に話した

「よかったじゃん夏美！あたしも応援するからねっ」

麻希はとても喜んでくれた

まるで自分のことのように、喜んでくれた

ありがとう、麻希

6—6

「こうちゃんっ！行こっ！」

私はこうちゃんの手をとった

「うんっ！」

こうちゃんも私の手をとった

こうちゃんの手は少し汗ばんでいた

私たちは2人で病院に行った、仲良く手を繋いで

「愛坂さん」

病院に着いて10分くらいで呼ばれた

私はこうちゃんの手をもう一度強く握った

私が『行こう』と言おうとしたとき

「行こうか」ってこうちゃんが先に笑いながら言ってくれた

「こんにちはわ」

中山先生は明るくほほ笑んで迎えてくださった

まるで、お腹の中の赤ちゃんをどうするか決めたかを知っているように

6—7

「先生」

こうちゃんは中山先生に言った

「ちょっと待って。私は担当医の中山よ。あなたは？」

中山先生は言った

「あ、ごめんなさい。僕は夏美さんとお付き合いさせていただいている桜井航祐といいます」

こうちゃんは丁寧に言った

「桜井君ね。よろしく。でお腹の子どうすることに決めた？」

先生は私の顔を見て言った

私も先生の顔を見て言った

「私、産むことに決めました。彼もそれでいいと言ってくれてます」

私は言った

先生は

「夏美さん、いい彼捕まえたわね」

と笑って言うてくれた

「私も協力するわね。あらためてよろしく」

と付け足して言うてくださった

ありがとうございます、中山先生

第7章 告白2

第7章 告白？

7・1

「ただいまー」

私はいつも通り帰った

「お邪魔します」

こうちゃんと一緒に私の家に帰った

「あら、この前はどうもお」

私の母はこうちゃんに言った

「あ、この前は自己紹介もせずすみませんでした」

とこうちゃんは母に深深と頭を下げた

「そんな…謝らないでください」

と母は慌てて言った

「いやあ…本当に申し訳ありませんでした」

と言いながらこうちゃんは頭を上げた

そして母に自己紹介をした

どうやら母とこうちゃんは相性がいいみたいだった

7・2

「ママ、話あるから」

と私は母をテーブルの奥の方に座らせた

手前には私とこうちゃんが並んで座った

「ただいまー」と

聞きなれない組み合わせの声が聞こえてきた

「お、おかえり」

私は思わず動揺してしまった

私達の前に現れたのは

父と弟の羽標「ハジメ」だった

「なんで一緒なの？」

母は不思議そうに言った

「たまたま帰り道で会ったんだ。この子は？」

父も不思議そうに言った

7
3

「僕は…」

とこうちゃんが言いかけた瞬間

「あっ！」と羽標が指を差して言った

「どうしたの？羽標」

私は羽標に言った

「この人知ってる」

と羽標は言った

「まあまあとにかく座ってさっ！なんか話あるらしいから」

と母が言ってくれた

「僕は、夏美さんと現在お付き合いさせていただいている桜井航祐と申します」

父は無表情

「実はね、あたし赤ちゃんできちゃったの…こうちゃんの」

父、母、羽標、無表情のまま

「はっ？何言ってるの」と母はパニック状態

父は黙って目を閉じていた

「パパ？聞ってるの？」と

私は思わず怒鳴ってしまった

「ねえちゃん…まじ？」と羽標

羽標は小学5年生のくせに1番冷静だった

7
4

「ねえちゃん、生むの？」

両親はすっかり放心状態

もう私と羽標の会話になっていた

「生む」

私が一言呟いた

「彼氏さんは？ねえちゃん生むつつてるけどー？いいの？」

羽標はこうちゃんに言った

「僕は生んで欲しいと思っています。だって、僕達の赤ちゃんだもん。会いたいからね」

とこうちゃんは優しく言った

「はあ…まあ彼氏さんもいい人みたいだし、生んでほしいって言ってるし、生めば？」

羽標は優しく、活発で、

成績は中の中って感じだが、頭の回転が早く、とてもいい子

祖父に似てちょっとワルで、言葉づかいが悪いところは改善すべき点だが

可愛い顔とのギャップがあって周りからは人気があるようだ

しかし、当の本人は、恋愛などには全く興味が無いらしい

「ありがとう、羽標」

私は泣いてしまった

「泣くなよねえちゃん」

羽標はこうちゃんがいるのもお構いなしに私を強く抱きしめた

私より小さい体のくせに……私より温かくって……

なんか安心できた

7・5

「航祐君がいいって言うならいいんじゃない？」

急に母が言った

「ママ……」

「だって、航祐君いい子だしさあ……ママはこの子なら大丈夫な気がする」

ママは真剣な目で言ってくれた

「ありがとう、ママ」

さあて

問題は父である

「パパ、だめ？生んで」

いきなり父に振ってみた

父は静かに口を開いた

「生んでも構わない。でもそんなに生みたいのなら自立しなさい」

父はそう言った、目を閉じたまま

「自立なんて無理よ！働きたくっても働けないんだから！自立しろ
っていうなら

住む家と毎月の生活費をください。それだけあれば自立して生活
できるから！」

私は物凄い勢いで言った

こうちゃんも母も羽標も驚いていた

「わかった」と父は言った

7・6

今は10時

私は自分の部屋にあるベッドの上でこうちゃんと電話している

「僕達どうなるのかなあ」

こうちゃんは心配そうに言う

「もし、もしね、2人で暮らすってことになったらどうする?」

私は少しの不安を抱えながら言った

「そうだといいなあ。なんか2人で暮らすの楽しそう」

とこうちゃんは明るく言った

そのあと私達は「おやすみ」と言い合って電話を切った

「パパ？」

私は1階に行って、パパに話し掛けた

「夏美、本当に自立できるのか？」

と表情を変えないまま言った

私は無表情で首を縦に動かした

「待ってろ」

と父は自分の書斎へ行った

「これ」

と渡されたのは厚い茶封筒だった

「なにこれ？」

私がそう言うと

「それで暮らさない」そう言った

中を見るとたくさんのお金が入っていた

「住むところは？」

「明日探してきなさい」

と父は言った

第8章 義理の両親

第8章 義理の両親

8・1

「お邪魔します…」

「いらっしやい」

初めて見る顔が私を迎えてくれた

「あっあのっ」

私がそう言うのと「まず中に入って」と言い、私の背中を無理やり押した

客室と思われる畳が敷いてある部屋に案内された

「なっちゃん、おはよう」とこうちゃんは背後から私の頭をポンと叩いた

私とこうちゃん、こうちゃんのお母さんとお父さんと春乃ちゃん

私達5人は同じ空間に集まった

少しの間、沈黙だった

その重い沈黙破ったのは私だった

「初めまして、現在航祐さんとお付き合いをさせていただいている
愛坂夏美です」

私は笑顔で向かい側にいる3人に言った

「お父さん、お母さん、僕、この家を出ます」

こうちゃんは一気に言った

8・2

「何言ってるの？お兄ちゃん」

春乃ちゃんは不満気に言った

「春乃、ごめんね。僕ね、お父さんになるからさ」

そうこうちゃんが言った瞬間こうちゃんの御両親が顔を合わせた
そして

「航祐、どういうこと？」とこうちゃんのお母さんは言った

「僕の彼女のなっちゃんのお腹の中に僕達の赤ちゃんがいるんだ。
で、昨日なっちゃんの御両親に挨拶に行ってきた。そして2人で
暮らせて

言われたんだ。もし本当に2人で暮らせるなら、生んでいいって
彼女の

お父さんが言うてくださったんだよ。だから、2人で暮らす」

こうちゃんは言った

「暮らすにはお金が要るだろう」

とこうちゃんのお父さんが言った

「お金はうちの父が毎月くれることになりました」

と私は急いで言った

「航祐大丈夫なの？」

「うんっ、僕お父さんとお母さんみたいな仲のいい夫婦になるよ」

その後はほとんど会話も無く私はこうちゃんの家をあとにした

第9章 新生活

第9章 新生活

9・1

あれから1週間が経った

私達は

街中と言ったら街中

田舎と言ったら田舎

そんな場所にあるアパートに住むことになった

家からこうちゃんの小学校まで歩いて10分

家から私の通う中学校まで歩いて15、6分

そんな結構新しいアパート

部屋は3つでトイレとバスは別

台所だって普通に広い

だから私達は気に入っていた

「明日荷物ほとんど届くから」

私は荷物の整理をしているこうちゃんに言った

「分かった」

こうちゃんは忙しいのか、荷物に目をやったまま返事をした

9・2

引越しの時は

時間っていうのは

いくらあっても足りなくて……

気がつけば19時だった

「ごめん。もうこんな時間だね。今からご飯作るね」

私はこうちゃんに言った

「あ、なっちゃん、一緒に作ろう？」

こうちゃんは大きい瞳で私に言った

「え？あ、うん！」

私達は2人で台所に並んだ

その時だった

こうちゃんが突然私の顔をまじまじと見てきた

「そんなに見つめないで？」

私は冗談っぽく言った

「あの…さ、なっちゃん」

なんだかぎこちない様子だった

「うん…どうかした？」私が言った

「僕と結婚してください」

こうちゃんはズボンの右ポケットに入っていた指輪を私の手の中に入れた

「僕はまだ小学生で働けなくて本物の指輪は買えないけどいつか絶対買うから

今はこの指輪で我慢して…？絶対に幸せにする。なっちゃんも赤ちゃんも。

だから……僕と……結婚してください」

私は泣いた

今までにないくらいに

私を見てこうちゃんも泣いてしまったようで…こうちゃんも泣いていた

「もちろん」

私は言った

「ありがと。愛してる」

とこうちゃんは私に抱き着いてきた

やっぱり、可愛い…可愛すぎる…

「私も…愛してる…」

すみません……………

ご飯を軽く食べた後……………

私達は愛を確かめました

何度も何度も

名前を呼び合って

何度も何度も

たくさん唇を重ね合って

いくら、密着しても、まだ近づきたくて

いくら名前を呼んでも、足りなくって

ダブルベッドって素敵だなんて思いました

9・3

「今日病院に行く日？」

こうちゃんは布団をかぶったまま私に言った

「あ、そうだったあゝ」

私はすっかり忘れていた

「じゃあ行こう？」

こうちゃんは布団から顔だけを出して言った

「うんっ！」

私とこうちゃんは急いで洋服を着てご飯を食べて行った

移動手段はもちろん徒歩

バスやタクシー、電車を使うほど遠くにある病院じゃない

私達は仲良く手を繋いで歩いた

「こうちゃんの手って暖かいね」

私は極度の冷え性

「なっちゃんの手が冷たすぎるの。僕の手は一般的な温度だと思うよ？」

こうちゃんはそう言った

丁度5ヶ月くらい前は同じくらいだった身長

でも今、私はこうちゃんを見上げる

こうちゃんはとっても大きくなった

布団の中で、行為をする時も今では私を包み込んでくれる

まあ私が小さいのもあるけど……

身長とは逆に私のお腹はどんどん大きくなっていった

もう、学校には隠せない

第10章 告白3

第10章 告白？

10、1

最近学校では「太った？」とよく言われるようになった

「あたし、もともと太ってますー」

とか言って誤魔化してきた

もう、無理だ

———次の日———

『6ヶ月ですね。もう少しで、7ヶ月目に入ります』

昨日、中山先生が言ったこの言葉が、頭から離れない、授業中も

「こらッ！愛坂、なにボーっとしてんだ」

家庭科の先生に怒られた

家庭科はあまり好きじゃない

でも、今から、ママになるんだから、授業しっかり受けておかないと…

……ん……でも

……痛い

……痛い

お腹が痛い

どうしよう、授業中なのに

「ちょっと、大丈夫？」

麻希が心配している

「う、ごめん……………」

呼吸も辛い気がする

「大丈夫じゃ……………ないね、」

意識が遠くなってきた

気がつけば私は保健室にいた

「夏美ちゃん、大丈夫？」

保健の先生、話の分かる、優しい大阪風のおばちゃん先生

「あ、はい」

「あとね、先生気になったんだけど」

やばい

「最近何かあった？」

……ふう

「いいえ、別に無いです」

「だって最近朝、1人で来てるじゃない？」

先生ちゃんと見てたんだ

私は心に決めていた

妊娠8ヶ月目になったら、みんなに言おう

8ヶ月じゃ、明らかにお腹がおかしい事バレる

まだ、言わなくて、いいよね……

10・3

ガラガラ

教室に戻るとみんながいつせいに私を見た

今は技術の授業中のはずなのに

黒板の所に立っているのは……理科の先生で担任の笹沼先生

「なんで先生いるんですか？」

私は先生に言った

「ちょっと前に来なさい」

いつもはスマイルが可愛らしい笹沼先生の顔がなんか怖かった

「はあい…」

私は若干下を向き、黒板のところに歩いて行った

「あなた、みんなに隠していることがある？」

笹沼先生は怒っている？ いや、悲しんでいる

「別ありません」

私はそう言おうとした

「ありますよ」

そう真っ先に起立し言ったのは仁百だった

仁百はクラスの端から端まで聞こえるような声で言った

笹沼先生は小声で話してくれた

しかし仁百は耳を澄まして聞いていたようだった

「仁百、何言ってるのよ」

麻希は仁百のブレザーの袖を引っ張った

仁百の様子がおかしい

なんだか興奮しているようだった

10・4

「先生、夏美は妊娠しています」

……なんでそんなこと言うの？

……どうして

「な……なんで」

私は床に崩れこんだ

「夏美っ！」

麻希は私のところに来た

「酷いんじゃないの？ 仁百！」

麻希は物凄い勢いで仁百に言い、睨みつけた

「酷いのはどっちよ！」

仁百はそう言って、教室から出て行った

私は涙が止まらなかった

どうしていいか分からなくて

気分が悪くなってきたて

こうちゃん、助けて

10・5

泣き崩れている私の隣に麻希

麻希は言った

「みんなに隠してたことがあるの」

「待って……私が言う……」

私は立とうとした麻希に言った

「隠しててごめんなさい。実は仁百にも隠していました。

みんなを信じていなかったわけではないです。

でも、普通に考えたら…私なら…軽く引くし、できれば関わりたくない。

だから、みんなもそう思うかなって…だから言うのが怖くて…

普通でいれなくなるのが怖くて…生むぎりぎりに言おうと思っていました。

私は、生みます。相手はまだ小学生なんだけど、すごくいい子で…

みんながいやというなら、学校を辞めてもいいと思っています。

実はもう少ししたら生まれます。本当に勝っててごめんなさい。」

私はみんなに、自分が使える言葉を全て使って、1番伝えたいことを、しっかり伝えた

しかし、みんなの反応は予想通りだった

「キモい」 「同じ空間に居たくない」

「酷い」 「最低」 「顔も見たくない」

みんなはそう言った

でも、それでも、私は、いい

隣には、麻希がいる

傍には、こうちゃんがいる

お腹には、赤ちゃんがいる

影には、中山先生がいる

私にはそれだけで十分です

10・6

「何にもくないじゃない」

保健の先生に怒られた

教室が荒れてきたので、保健室に逆戻り

「クラスみんなで、話すから、あなたは体のことも考えて、保健室にいなさいね」

笹沼先生はそう言った

「じゃ、お願いします」

付き添いで来た麻希は、保健の先生に一言言って教室へ急いだ

「はいよー」

保健の先生は笑顔で麻希に言った

「妊娠してるってまじかあ？」

保健の先生は早速言った

「まじ……です」

保健の先生はいつも私達目線

「引くわあ……でもなあいいことだぞ？」

思ったことは言う、でも、先生だから

「普通引きますって……」

「いいんだよ。だって、ちゃんと愛し合ったんだろ？」

先生は真剣に言った

「はいっ！愛してるんです！彼氏、実は小学生なんですけど、いい子なんです！」

私は言った

「なら、いい！元気な子、生めよおおー」

先生は元気に言った

「ありがとうございます。」

私も笑顔で返した

第11章 あと少し

第11章 あと少し

11、1

あの日から私は学校に行っていない

学校に行っていないと言うより

クラスメイトや同じ学年の人に会っていない

麻希の話によると

私が妊娠していることは2日も経たないうちに

全校生徒に広まったらしい

あのあと、私は教室には戻らず、麻希に荷物を持ってきてもらい家に帰った

携帯を見たら、仁百からメールが来ていた

『夏美、ごめンね

夏美のコト嫌いなわけじゃナイよ。

大スキだから、、だからこそ悲しかったの

マキには言うのになんでわたしに言わないのお？

ひどいよ。』

私が悪かった

ごめんね、仁百

苦しませたね、悲しませたね

私はこうちゃんに言った

「明日から当分学校に行かないで家に居るね。」

こうちゃんは笑顔で

「うん。でも家に居ても気をつけてネ？なんか、もうすぐってカン
ジするゝ！」

そう言った

流石に、学校で何言われたかなんて言えなかった

『金倉ちゃん、1人だぞ』

学校に行かなくなって3日目にあるクラスメイトからメールが来た
いつも人懐っこく喋りかけてきて、誰とでも話す、可愛いキャラ
の田井中優都「タイナカ ユウト」

『どういうこと?』

私は即行返信した

『おー☆よかった返信来て♪
元気ですかい?』

初めてに近いメールのやりとりに、ちよつとドキドキした

『元気だよ。私も、お腹の赤ちゃんも』

『よかったー☆』

あのさ、金倉ちゃんさ、なつっーのことかばったじゃん?
そんでね、なつっーのコト侮辱したけど、自分の中だけで秘めて
いた

金倉ちゃんもかなり侮辱されてんだ。助けてやんなよ』

可愛いキャラはメールでは消えていた

『教えてくれてありがと。やっぱりクラスの人みーんなあたしを批判してるの?』

『んまあー大体

優都みたいに、別になんとも思っていないのも

密かにいるんじゃないかなあー?

ああそおいえば、メガネっ子ちゃん3人組はなんとも思っていないみたい』

メガネっ子3人組

メガネといえば、あまり好かれていないようなイメージが強いが

あの3人組は全然好かれている

昼休みはよく、クラスの女子に囲まれていた

『そっかあ…ならさ、3人組と麻希、くっ付けちゃってくれない? たーちゃんの力で』

『うーん…頑張ってみる☆そのかわり、赤ちゃん生まれたら抱かせろよおー☆』

田井中優都 通称たーくんはやっぱりいい奴だ

『もちろんっ☆じゃ、また。よろしくね』

『やったあー♪約束ナっ☆分かった!じゃな〜』

1
1、
3

あれから1週間経った

私のお腹はパンツパンに

それと同時に私の胸もパンツパンに

今までは度々吐き気がしたが、それもなくなった

1週間でこんなに体調に変化があるなんてすごいと思った

プルるるっプルるるっ

15..30過ぎ

『090・****－####』

見たことない携帯番号から

「はい…」

「もしもしー？」

なんだか聞いたことある優しい声

「はい…」

「優都だよー」

「あっ、たーくんか」

「優都で悪かった？ふふっ」

「全然 待ってたよ連絡」

「最近金倉ちゃんと話したー？」

そういうえば、あの日以来、会ってないし、話していない

「全然だよお」

「そっかぁー優都、くっ付けちゃった☆どうやってくっつけたかは

聞かないでーめんどいから」

ありがとたーくん

11・4

学校に行かないと時間が経つのが早い

というか、暇

もう体調もいい

というか、早く生みたい

それが今の本音

予定日は来月の6日と決まった

この辺はまだ暖かい

しかしそろそろ冬らしくなるだろう

なんて：暇だから桃の毛糸で靴下を編んでいた手を止め小説家みたいなことを考えていた

「ひまー…」

思わず独り言

今日は11月の10日

実に晴れ渡っている：良き日だ

「いったい…」

わかんない……今までには味わったことのない痛み

急に：痛い…

人間が絶えられるのかっていう痛み

『痛み』なんて優しいものではない…………『激痛』だ

「あぁれ…」

痛みは引いた

なんだかよくわからない……

でも怖かったから病院にすぐ1人で行った

11・5

「先生、もう生まれちゃうんですか？」

平日だったので空いていた

なので私はすぐ、診察室に呼ばれた

「うーん…夏美さんの体じゃ出産には耐えれないと思う」

確かに私は小柄

でも、出産に耐えれないほどではないと思っていた

「私が小さいからですか？」

「んー違うの。やっぱり、若いと体にかかる負担が大きいし、もうすぐ赤ちゃんが生まれそう」

中山先生は言った

「帝王切開…とか聞いたことあるかしら？」

中山先生は私に少し近づいて言った

「あります…」

私は確信した

私は帝王切開で生むことになる

「先ほどの痛みは前駆陣痛『ぜんくじんつう』というもので陣痛に似たもので、陣痛ではない」

中山先生はさっきの痛みについて詳しく説明してくださった

「もう37週目に入っているようなので、1週間後に手術をしたいのですが大丈夫ですか？」

急過ぎる出産に私は少し戸惑っていた

「迷っている時間はあまりありません。遅くても18日には手術をします」

先生はそう言った

先生はその後、明後日までには病室を確保しておくからそれまでには荷物を持って来なさい

と言った

11・6

「ただいまー」

何も知らないこうちゃんはいつも通り元気に帰ってきた

私は帰ってすぐ夕食の準備をしていたからもう、食べるだけだった

「今日も、美味しそう…」

こうちゃんはテーブルにのったお皿の中を覗きながら言った

「こうちゃん、話があるの」

私は重苦しく言った

「う…ん」

こうちゃんはさっきまでの笑顔を消して水で洗った手を拭きながら、座った

「実はさ……………」

私は中山先生から説明された今の赤ちゃんの状況

帝王切開のことを丁寧に細かく話した

「そっかあ…………入院…ねえ」

こうちゃんは視線を下に落とした

「でも、そんなに長い間じゃないし」

私は必死

「うん。でも、入院するしかないんでしょう？」

こうちゃんは泣きそうな顔で私に言う

「そうだよ。こうちゃんもパパになるんだから！少し我慢しないと」

私はそう言って誤魔化した

「そうだね。僕はパパになる！でもね、毎日病院に行っていていい？」

こうちゃんは一粒だけ涙を落として行った

「もちろん」

私はこうちゃんに笑顔で言った

こうちゃんは大きい瞳を細くして笑った

第12章 手術まで…

第12章 手術まで…

12、1

こうちゃんは今日休んだ

病院に「明日行きます」って電話したら

「お家の方と来てください」って言うから

病院に行ってから

入院に際しての注意事項や手術の説明

血圧や体重測定、問診により、私や赤ちゃんの健康状態の確認

超音波検査などを行い、赤ちゃんの位置を確認

などをした

そして最後に中山先生は「がんばりましょうね」と言ってくださった

なんだか今日は長かった

とても疲れた

こうちゃんも相当疲れたようでまだ20時なのに病室で眠っていた

こうちゃんの寝顔を見ながら私は考えていた

「こうちゃんは、女の子ほしー？」

「うーん…僕は男の子がいい！」

「えー？あたしは女の子！」

この会話があって、青の毛糸の靴下と桃の毛糸の靴下を作り始めた

「名前どうしよう…」

「うーん…」

「まあ、生まれたら決めよっか」

この会話があったから名前はまだ決まっていない

気がつけば21時だった

こうちゃんはまだ眠っていた

明日こうちゃんは学校がある

なので、私はこうちゃんを無理やり起こして家に返した

おやすみのキスをして

12、2

なんだか暇で

病院で過ごす時間は長く感じた

暇だと思っていたら誰かがドアを叩いた…こんこんこん

「はい」

私は無愛想に返事をした

ガラガラ…そこに立っていたのは

麻希だった

「ま…き」

麻希とはあの日以来の再会

メールはしていたが会うのはかなり久しぶりだった

「夏美…元気してた？」

麻希は泣いていた

私ももらい泣き

「ばか…泣かないでよ…あたしもらい泣きするの知ってるくせに…」

「だって…久しぶりなんだもん…しかもそのお腹…めっちゃくちやお
つきいじゃん…」

麻希は泣きながら私に言った

麻希は今朝、こうちゃんとバツタリ会ったらしい

そして麻希は私のことをこうちゃんに聞いたらしい

だから居場所が分かったって言っていた

そのあと彼女は学校での出来事を私に話した

楽しそうに

もちろんたーくんの活躍のことも聞いた、さすがと思った

手術まであと………5日

1
2
3

とばします

だって…暇だし、何にも起こらないから

こんなことズラズラ書いたらつまらないし

でも、こうちゃんの毎日話面白かった

私の楽しみはこうちゃんの話のみ

だって、ご飯も栄養万点ってことは分かっているんだけど、美味しくない

本当につまらない4日間だった

目を開けたら母が私を覗き込んでいた

「おはよ」

母は笑顔で言った

「なんで居るの？」

私は母に言っていなかった、今日のことを

病室は教えていたし、帝王切開ってことも教えた

でも、日にちまでは教えていなかった

「羽標から聞いたの」

私は羽標とは仲がいい

だから、羽標には言っていた、手術のことも日にちも全部

「がんばりましょうね」

そう言う母の後ろには羽標が居た

私は母に「うん」とだけ言っていると羽標を近くに呼んだ

「おまえー！ママに言ったなあー！」

私は久しぶりに見た弟が笑顔だったからすつごく嬉しかった

羽標のおかげで手術前にリラックスできた

ありがとう、羽標

そのあと、少し遅れて、こうちゃんが来た

そして私は手術室に入った

第13章 誕生

第13章 誕生

13・1

背中にうった麻酔はとても痛かった

でも少ししたら痛みは引き、意識はあるまま感覚だけがなくなった

それから……お腹をくすぐられているような感じがして……

そしたら、赤くて皺くちやの赤ちゃんが大きな泣き声をあげていた

なんだかよく分からなかったが赤ちゃんは無事に生まれてくれたらしい

本当に良かった

「おめでとう！男の子よ」

中山先生は私に赤ちゃんを見せた

「先生、ありがとうございました」

私は思わず泣いてしまった

「よく、頑張ったわね」

「はい……」

私が赤ちゃんを抱いた時

「なっちゃん！」

こうちゃんは私を心配してくれていた

「こうちゃん…私」

「喋んなくてもいいよ…頑張ったね、なっちゃん…ありがとうね」

こうちゃんは号泣していた

「こうちゃん…抱いてやって…？」

「うん」そう言うところからは生まれたばかりの赤ちゃんを抱きあげた

「可愛い……」

こうちゃんの顔は涙と笑顔で溢れていた

「こうちゃんも赤ちゃんも可愛い」

私は1人、呟いた

13—2

「夏美ちゃん」

こうちゃんのお母さんが病室に来た

「こんにちわ」

麻酔が切れてきて少しお腹の傷が痛むが私は笑顔で言った

「おめでとう。頑張ったわね。」

こうちゃんのお母さんは笑顔で言った

「はい、ありがとうございます。」

「夏美ちゃんだったらきつといいお母さんになれるわね。期待してるね」

とこうちゃんのお母さんは言い「赤ちゃん見てくる」とニコニコしながら病室を去った

「姉ちゃん、痛かった？」

羽標がニコニコしながら母と2人で来た

「少しだけ…ね」私は言った

「へえー…じゃ俺の子供も生んで？」

羽標は無表情で言った

「何言ってるのー？彼女に生んでもらいな」

私は冷たく言った

「じゃ、姉ちゃんが俺の彼女になってー」

無表情で言っているから、妙に真剣に感じる

「姉ちゃんが好きなの？」

「愛してる」

いきなり言われた意外な言葉に私が言い返せなかった

「羽標、お姉ちゃんはまだもうママなんだから、バカなこと言ってんじゃないの！」

母はそう言ってなんとかしてくれた

「だってー：姉ちゃんが勝手に子供作ったんじゃないかー！俺、ずっと好きだったのに」

初めて聞いた、大好きな弟の本音

でも、できれば、聞きたくなかった

「夏美、羽標のことは気にしないでいいから」

と母は羽標を見ながら言った

「なんだよー俺、結構マジだったんだぞ？」

「ほんと？羽標」と私が言うと「当たり前。今度襲ってやろうと思ってたのに」羽標はそう言った

可愛い顔してるくせに：そんなに可愛い顔がもったいない

「もう、襲えないね、残念でした」

私は笑って言った

「はぁ…まあいや」

と羽標は言ってどこかに行った

「困った子ね。まったく」と母はため息をついていた

最終章 若ママ&若すぎパパ

最終章 若ママ&若すぎパパ

最終、1

私はそのあと、1週間くらいたったら退院できた

でも、お腹の傷を縫い合わせた糸を抜いたり、ホッチキスを外したりするのはとても痛かった

なかなか傷口が塞がらなくて、シャワーを浴びるのにも日にちがかった

私は病院のドアを開けた

初めて家族3人で外に出た

こうちゃんは両手に私の着替えなどが入っているバッグを持っていた

私は赤ちゃんを抱いていた

久しぶりに見た空は、晴れていた

雲一つない空だった

もうそろそろ12月なのに春のように晴れていた

まるで、神様が私とこうちゃんと赤ちゃんを優しく包み込んでくれているようだった

最終「2

家に帰ると

私の両親と羽標、こうちゃんの両親と春乃ちゃんがごちそうを準備して待っていた

「おかえり、姉ちゃん、兄ちゃん」

羽標は照れ笑いで私とこうちゃんに言った

「ただいまっ！羽標クン！」

『兄ちゃん』って言うってもらえたのが相当嬉しかったらしく…

「ただいまっ」

私も遅れてそう言った

「赤…ちゃん…？」

そう不思議そうな顔をしながら春乃ちゃんが寄ってきた

「そうだよ。可愛いでしょ？」

私は春乃ちゃんに赤ちゃんを抱かせた

「可愛い…」

春乃ちゃんは初めて私の前で笑った

「お…姉ちゃん…」

私は初めて春乃ちゃんから「お姉ちゃん」って言うてもらった喜びのあまり、泣いてしまった

「お姉ちゃん…?」

「ごめんごめん。お腹空いたー! 春乃ちゃん、あっち行って食べよっ!」

「うん! お姉ちゃん、赤ちゃん」

「あ、春乃ちゃんが抱いてきて?」

「分かったー!」

赤ちゃんってすごいって私は心から思った

最終、3

「いっただっきまーす」

こうちゃんの元気な声

私の母とこうちゃんのお母さんは赤ちゃんを見ている、楽しそうに

私の父とこうちゃんのお父さんは2人でお酒を飲んでいる

羽標は私にべったりくっついて、

春乃ちゃんはお母さん達に混ざって赤ちゃんを見ている

こうちゃんは夢中で食べて、たまに私に「あーん…」って食べさせる

幸せ、とっても……

「皆さんに発表があります」

こうちゃんは大袈裟に言った

「この子の名前を決めました」

そう、私とこうちゃんは私の入院中に赤ちゃん名前を決めていたのだ

こうちゃんは学校で考えてきたんだとよく自慢気に言った

「なんて読むの…?」

春乃ちゃんは私に近寄ってきた

「あれは、かずゆって読むの」

そう、この子の名前は『和優「カズユ」』

入院中に決めていたと言ったけど、結局決まらなくて…

今日の朝、決まった

「名前の由来は、退院した日、初めて家族で外に出た日の空が
優しくって平和な日本らしいなって思ったからです。かずゆって
読みます」

私はそうみんなに言った

みんなは頷いてくれた

今日から、和優は私とこうちゃんの大切な子供

私達の愛の結晶

最終 4

翌日、家にたーくんと麻希を呼んだ

「かわいいー!!」

と言ってうちにあがってくるなりたーくんは和優を抱き上げた

「ちょっと!落とさないでよー!」

と麻希は少し慌てた

「大丈夫だよ大丈夫!」

たーくんはそう言って、和優の頬に自分の頬を近づけた

「たーくんって赤ちゃん好きなんだね」

私がそう言っていると「大好き大好き!」とテンションが高いまま言った

「可愛いね、たーくんも」

と麻希は少し呆れて言った

「麻希も抱いてやってね?」と私は笑顔で言った

「もちろん！」と麻希ははりきっていった

和優がもう少し大きくなるまで私は学校には行かない

でも、またちよこちよこ遊びに来てくれるって2人は約束してくれた

その次の日は、こうちゃんが学校の後、友達を連れてきた

私がよく分からない間にこうちゃんも、学校で

結婚のこと、子供のことをみんなに告白していたらしくて

もう、みんな理解してくれていようだった

人間関係っていうのはなかなか上手くいかない

恋愛関係っていうのもなかなか上手くいかない

人生なにかあるか分からない

私も思っていた「妊娠なんてありえない」って

でも、私の周りには素晴らしい人ばかりで

私は、幸せになれた

いい親をもち、いい弟をもち、いい友達をもち

いい彼をもち、いい環境をもち

本当に今、幸せです

ありがとうございました。

最終章 若ママ&mp;若すぎパパ（後書き）

今後の参考にするため、是非ご感想お待ちしております。

第2シリーズもあるので

ここに出そうか出すまいか、迷っております。

是非ご意見、ご要望お願い致します。

これまでお付き合い、ありがとうございました！

※希望が多い場合は、第2シリーズも載せたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9863h/>

若ママ&若すぎパパ

2010年10月12日07時51分発行